

古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年 8月 1日

日時	平成28年 7月28日	時間	10:00～12:00
場所	金沢区役所リハーサル室	出席人数	15名
講師	真田 雅行氏	作成者	内田 孝知
テーマ	第二学習 奥の細道⑦		
概要	<p>【象潟→越後路→市振→越中路】</p> <p><象潟>6月16日～17日</p> <p>川や山、水や陸の佳景を数限りなく見てきたが今や象潟にこそ美を感得しようと詩心を凝らしている処である。酒田の港より東北の方へ、山を越え、磯を伝い、砂を踏んで十里の道を行き、日が傾いたころ象潟へ着いたが、潮風が砂を巻き上げ、降りしきる雨で景色は朦朧とけぶり鳥海山も隠れて見えない。暗中摸索、「雨もまた奇なり」と詠われるように雨中の景色もそれなりならば、雨上がりの晴れた景色は格別だろうと漁師の小屋に膝を入れて晴れるのを待つ。翌朝は良く晴れて象潟に船を浮かべ、能因島に着け、能因法師の幽居跡を訪ね、さらに向う岸には西行法師が「花の上漕ぐ」と詠まれし桜の老木が有り法師の形見を残している。水辺に御陵が有り神功皇后の御墓と言う。干満珠寺と言う寺有り、ここに行幸有りと言うがいまだ聞いていない、どういう事なのだろうか。この寺の方丈に座ってすだれを巻き上げると風景が一望に見渡され、南に鳥海山が天を支え、その影が水面に映っている。海は北にあって波が打ち入る所を汐越と言う。広さは縦横1里ばかり、俵は松島に通うところが有るがまた違う所あり。松島は笑うがごとく、象潟は憂うがごとしか。寂しさに悲しみにを加えて象潟の地の有り様は魂を悩ませるに似ている。</p> <p>○象潟や雨に西施がねぶの花 ○汐越や鶴脛ぬれて海涼し ○並み越えぬ契りありてやみさこの巢 曾良</p> <p><越後路>6月18日～26日</p> <p>酒田の人々と名残りに日を重ねていたが、北陸道の雲のかなたを望みつつ、漸く出立、前途遙かの思いに胸が痛み、聞くと加賀の府まで130里も有ると聞く。鼠の関を越えれば越後国、歩みを進め、越中の国市振の関に至る。この間9日、暑さと雨で心を悩まし、病気になったので道中記は書き留めなかった。</p> <p>○荒海や佐渡に横たふ天の河</p> <p><市振>7月12日</p> <p>今日は親知ら、子知らず、犬戻り、駒返しなどと言った北国一番の難所を越えて疲れたので枕引き寄せて寝たら一間隔てて若い女二人の声聞こえる、越後の国新潟と言う所の遊女、伊勢に参宮するのでこの関まで男が送って来た。明日は故郷に帰るので言伝等したためている処。愚痴を聞いているうちに寝入った。行末を思うと不安、僧衣を着た坊様の後をついて行き、お情けで結縁をと頼まれたが不憫とは思いますが我々は所々で留まるので、ただ人の行くに任せて行きなさい神明の加護、恙なく行くでしようと思いき放したが可哀想な事したと言う思いが暫くやまなかった。</p> <p>○一つ家に遊女も寝たり萩と月 (曾良に語れば曾良は書き留めてくれた)</p> <p><越中路>7月14日</p> <p>黒部川は48ヶ瀬と言われるほど川別れしており数え切れぬほど川を渡り、那古と言う浦に出た。歌枕の担籠の藤波は春でなくても初秋の情緒が有るだろうと訪ねるべきものをと人に尋ねるとここより5里磯を伝いて向うの山陰に入っても漁師の苦葺きの貧相な家しかなく、一夜の宿も貸すものはいますまいと言い威かされたので、担籠に行かず加賀の国に入る。</p> <p>○早稲の香や分け入右は有磯</p>		
次回予定	平成28年 8月 11日 10:00～12:00 於：金沢区役所リハーサル室 第一学習 赤井村石井家文書⑧		